

鷗友学園女子中学校

二〇一四年度

一次入学試験問題

【国語】

時間 50 分

【校長先生からのメッセージ】

肩の力をぬいて、ゆったりと深呼吸をし、心を静めましょう。
一時間目、「国語」の試験から今日の入学試験が始まります。
今日までがんばってきた自分を信じ、落ち着いて取り組みましょう。
あなたが、持っている力を十分に発揮できるよう願っています。

【注意】

- 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 2 問題は15ページまであります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生を呼んでください。
- 3 問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この地区には、ずっと昔から『鹿踊り』が伝えられている。この辺では、カモシカのことを『シシ』または『アオジシ』と呼んでいる。

カモシカの大きな雄を中心、雌ジシ、子ジシたちが仲よく遊んだり、時には角をつき合わせて戦ったりする様子を踊りにしたものだそうだ。

おとなのおどる『鹿踊り』は、秋の氏神様の祭りに、青年団の人たちが勇ましくおどる。

運動会には、毎年、六年生がおとなの頭にそつくりの頭と衣装をつけて、地区のお年寄りの笛や太鼓に合わせておどるのだ。運動会の大事な呼びものの一つになっている。

雌ジシは一頭、これはもう高橋さんの健に決まっている。健は、六年生の中でも背もいちばん高く、勉強も運動もいつもトップ。児童会長もやっている、かつこいい学校じゅうの人気者だ。ほかの子がなるなんて考えられない。

それに高橋さんちは、とうさんがこの村に来た時から世話になっている。地区中でいちばん親しい家だ。みや子も健をお兄ちゃんみたいに思っている。健が雌ジシになるのがうれしい。

雌ジシは五頭。これは六年生の女の子。それに四隅に花かざりのついた笠をかぶった女の子が四人。これは五年生と決まっている。

ところが、今年の六年生は女の子が四人しかない。雌ジシのひとりはどうしても五年生から出ることになる。五年生からだれが選ばれるか、運動会の話になると、きまってその話になった。そして、それは、地区長さんちのさきえか、みや子だろうとみんながうわさしている。

五月に入ってすぐ、帰りの会で先生がいった。

「みんなも知っている通り、今年の鹿踊りは六年生だけでは、たらない。五年からひとり出すことになった。あすの放課後から高橋さんちのじつちやたちが来て教えてくれる。練習は、結構きつらしい。途中でいやだ、代わってくれなんてわけにはいか

ない。これから十日あまり、がんばってみたいと思う者は、家の人に相談してこい」

教室のあちこちで、「さきちゃ」「みやちゃ」の声がざわざわとおこった。

みや子は、ずっと小さい時から鹿踊りが好きだったし、自分がおどれたらいいなと、あこがれていた。小学校に入学して、職員室前のガラスケースに並んでいるシシの頭を見た時、これがかぶって胸に下げた太鼓を打ちながらおどる自分を想像し、うっとりした。

それが、一年早くおどれるかもしれない。しかも大好きな健ちゃといっしょに。心がおどった。とうさんだって、きっと賛成してくれる。すぐにでも、「はい、やります」と、手をあげたかった。

教室を出て昇降口へ歩いていくみや子の耳に、さきえをまん中にして階段をおりてくるしげ子たちの声がとびこんできた。

「さきちゃ、あんた、『鹿踊りやる』って、いうでしょ。五年生から出るったら、あんたしかないもんね」

「そうだよ、さきちゃ、がんばってね」

「わたしだって、やりたいよ。でも…」

「じゃ、あした、まっ先に『やります』っていいなよ、ね」

「でも、わたし、体育、苦手だもん」

「体育なんて、関係ないよ。さきちゃの家は地区長だし、さきちゃの兄ちゃ、一昨年の雄ジシ、やったじゃん。さきちゃ、やりなね」

「あたかも賛成だな。鹿踊りは、この地区の伝統芸能だって、うちのばっちやいってたよ」

「そうだよ。『よそもんなんかやらせられね』って、うちのとうちやもいつてるもん」

「よそもんは、よそもんだよ」

しげ子は、下駄箱の前に立っているみや子を見ると、わざと聞こえるようにいった。

「そうだよ。もともとの地区の子がおどらなきゃね」

「さきちゃがやるっていったら、みんなで手はたくさんからさ」

しげ子たちは、さきえを囲んで昇降口を出ていった。さきえが肩こしに、ちよつと振り返った。

—よそもん—

体がきゅーんとかたくなった。

みや子は、とうさんがよく話していたことを思い出した。

「とうさんが、牛を飼いたくてここへやってきた時、『よそもんは何ができる。じきに尻つぽまいて逃げ出していくさ』と、いう目でみんなから見られていた。とうさんは、なんとかして早くみんなと仲間になりたかった。

だから、道で会う誰にでもこつちから声をかけた。土地の言葉で話さなくちゃと一所懸命おぼえたよ。だけど、五年たってもよそもんっていわれて相手にされなかった。

十年たって、やっとうさんが本気でここに住もうとしていることが、少しずつみんなに分かってもらえた。それから地区の寄り合いに出て、ものがいえるようになったんだ。新しい土地になじむということは、容易なことじゃないんだよ」

かあさんはいちいちうなずきながら聞いていた。だけど、みや子は、とうさんの話が少し大げさなんじゃないかと思った。

（わたしは、ここで生まれて、大きくなった。友だちもいるし、みんなと仲よくしている。誰からも仲間はずれにされたことなんてない。みんな同じ仲間だ）

と、思っていた。

でも、^①とうさんのいつていたことは本当だったのだ。みんなは、心の中でわたしをよそもんと思っていたのだ。

「みやちゃ」

下駄箱の前で、じっと立ちつくしていたみや子の肩を、誰かがぽんとたたいた。はっとして振り返ると、健が白い歯をのぞかせて笑っていた。

「みやちゃ、何ぼんやりしてた？」

「あつ、健ちゃ」

「どうした、目のまわりが赤いよ」

「ううん、なんでもない」

ふつと涙がこぼれそうになるのをこらえて、みや子は足元を見つめていた。

「ねえ、みやちゃ。これからちよつと家へ寄らないか。じっちゃが、鹿踊りのはやし方集めてんだ。音合わせするんだって。聞いてけよ」

「ほんと、聞きたい」

「まわり道だけど、いいよね」

「うん」

うなずいて、少し心配になった。寄り道して、いつもの牛の世話をする五時半ごろまでに帰れるだろうか。校舎正面の大時計を見上げると、四時ちよつと過ぎていく。

「ちよつとだけ聞いて帰るね」

健の後ろを追いながらいった。

「ああ、そうしろよ」

健の家は、学校からみや子の家と反対方向に二十分ほど行ったところにある。

若葉の芽吹いた道を健とならんで歩いた。

背の高い健がすつすつと歩くと、小さいみや子は時どき小走りになる。どこかで、もうすっかり上手になったウグイスが鳴いている。道ばたには、ハルジオン、アザミ、ホタルグサなどの花々がまっさかりだ。

「ねえ、健ちゃ、雄ジシ、おどるんでしょ」

「うん、今日、先生からいわれた。じっちゃんからしっかり教えてもらえって」

「健ちゃのシシ、きつとすてきだろうなあ」

「ああ、一所懸命、練習するさ」

「じっちゃに習えるからいいね」

「みやちゃ、みやちゃも雌ジシ、おどるんだろ。五年から出る子、みやちゃだって、六年生みんないつてるよ」

「ほんと？」

「みやちゃなら、きつとうまくおどれるよ」

「健ちゃも、そう思ってくれてる？」

「うん、もちろんだよ」

みや子の胸の中がほかっとなった。だけど、だめなんだ。

「わたし、だめだよ。よそもんなもの」

「よそもん？　なんで、みやちゃがよそもんなんだよ」

「だって、みんなが、そういつてるもん」

「みやちゃは、よそもんなんかじゃないよ。おれと同じここの子だよ」

「だって……。とうさんもずつとそういわれていたっていうし、わたしもそういわれたもん」

「みやちゃは、よそもんじゃない。みやちゃのとうさんは、もうずつとここで牛飼って、畑たがやしてき。うちのとうちやと同じでないか。みやちゃも、ここで生まれて、ここの学校へ行って、みんなとどこがちがうんだい」

「わたしもそう思ってた。だけど、みんなが」

「だれがなんていったて、みやちゃはここの子だよ。おれは、そう思ってる」

「ほんと？」

「あたりまえだろ」

健は、みや子の肩に手をかけ、うつむいた顔をのぞき込んで、きっぱりいった。

みや子は、腹の底から熱いものがどつくんどつくんつき上がった。ほほがぼつぽと熱くなった。

健ちゃのいう通りだ。しげ子たちのいつていたことなんて、なんでもないと思えてきた。

「みやちゃ、元気出せよ。みやちゃがめそめそするなんてらしくないよ。六年生に負けずにおどれよな」
こつくり。耳まで熱くなっているのが健に知れそうで、ちよつぴりはずかしかった。

「おかえり。あら、みやちゃもいっしょ」

庭に引きこんだ流れでワラビを洗っていたおばちゃんが、にこつと笑った。

「うん、みやちゃんに、『じつちやが鹿踊りのはやし合わせやってる』ってさそったら、『いく』っていったから」

「そう、もうじき終わると思うけど、さあ、おあがり」
おばさんの声をかき消すほどの勇ましい笛や太鼓の音が外までひびいてくる。高橋さんの家は、昔、この辺の庄屋をつとめたほどの大きな家だ。

健とみや子は、長い廊下を歩いて、そと奥の座敷をのぞいた。横笛は、じつちやと健のとうさん、大太鼓、小太鼓、それに鉦。高く低く、ゆったりと、時に、するどく流れる笛の調べ。鴨居にはった山神様のお札をびりびりとふるわせる勇ましい太鼓のひびき。

細かく打ちならす小太鼓。そして、チチチ、チリチリとすんだ鉦の音。

笛が長く尾を引き、小太鼓の細かいリズムの後、ドドンと大太鼓がなって、はやしは終わった。

みや子は、つめていた息を、「ほっ」と、大きくついた。

二人は、いつの間にかしつかりと手をにぎり合っていた。手のひらがじつとりと汗ばんでいる。

「みやちゃん、ぎでだっか」

じつちやが、まっ白な長いまゆげの下から笑いかけた。

「健ちやがさそつてくれたから」

「そうか、そうか。あずから練習さはずめるでな。けっぱらねばなっす」

② みや子は、どうしても鹿踊りに選ばれたいと、また思った。

「みやちゃん、もう五時だよ。帰らねばならんのじゃない」

手をふきながらおばちゃんが顔を出した。

「えっ、五時!!」

みや子は、とび上がった。

放牧場の入り口に集まって鳴きたてる牛たち。サイロからフォークでエンシレージを簞につめているとうさん。顔をまっ赤に

してそれを牛小舎に運んでいる浩太、洋平。今晚たくまきを一輪車にのせて運んでいる純平。

そして、帰ってくる牛の乳をしぼるのを気にしながら、夕飯のしたくをいそがしくしているかあさん。

③ みや子の頭の中でそれらが一ぺんにぐるぐるつとまわりだした。どうしよう。

「おばちゃん、わたし帰る。さよならっ」

ランドセルをしようのもどかしく、運動靴をつっかけて走り出た。

「みやちゃん、電話しといてあげるから、気をつけてお帰り」

おばちゃんの声が追いかけてきた。

「みやちゃん、送っていくよ。待ちな」

健が追いかけてきて、みや子と並んで走った。学校まで十五分。それからどんなに走ったって三十分じゃ行かれない。六時近くになってしまう。とうさん、おこっているだろうな。ごめん、かあさん。

「みやちゃん、近道して行こう。川、飛び越えて、学校の裏山ぬけていけば、みやちゃんちの放牧場の横に出る。ずっと早いよ」
健が走りながらいった。

「そんな道、あるの？」

「ちゃんとした道じゃないけど通れる。おれ、知ってんだ」

健は立ち止まると、ガードレールを長い脚でひよいとまたいだ。みや子にも手をかしてくれた。ガードレールの外は、草の茂った急な斜面だ。その下は川が流れているが、上からは見えない。

健は体をななめにして、すすつとすべり下りていった。途中でちよつと止まり、そこから大きくジャンプして川の向こう側の草むらに飛びおりた。

「さあ。みやちゃん、途中に出っぱった岩がある。そこまでおりたら、思いつきり飛ぶんだ」

「うん」

うなずいて下をのぞきこんだが、草の茂ったがけはどこが岩だか川だか分からない。だけど、（健ちやのとこまでいけば）と、勇気を出してがけをすべり下りた。かたい岩があった。

「そら、みやちゃ、おれんどこまで飛べ」

健が両手をひろげて大声でいった。一つ深呼吸して、思いっきり飛んだ。

あつ。

足元がずずとくずれた。何かに足をとられた。バランスがくずれ、健の足元にドスンところがあった。

「痛っ」

「みやちゃ!!」

健の叫び声と、左手のひじにものすごい痛みがずきーんと走ったことだけは覚えている。

——四方に、まゆ玉のようにピンクの花をつけた細竹を三本ずつ立てた花笠をかぶった女の子がひとりずつ立っている。細竹がゆらゆらとゆれる。しげちやももちやも、お化粧したほほがもも色にそまっつかわいい。

まん中に健ちやの雄ジシがいる。とがった二本の立派な角。大きく見開いた目のまわりを、いかめしくふちどりの頭をふり立ててぐるりぐると大きくまわる。黒い衣装に、首から下げた太鼓をたたきながら、今度は脚を高くあげて、右に左に、前に後ろにす早く跳びはねる。

そのまわりを、角の短い雌ジシたちがまわっている。黒地に袖と上着のすそに入った赤と白のすじがあざやかだ。雌ジシは——頭ずつはねながら健ちやのそばに寄っていき、また離れていく。

みや子も、右、左とばかりをあげては太鼓をたたき、両手を大きく開いて高く跳ぶ。

健ちやが大きく両手を前につき出し、腰を低くしずめた。と思うと、速い調子で太鼓をたたきながら前こごみの姿勢で頭を振りたて、つつつと、みや子のそばに寄ってきた。みや子も健ちやに合わせてトトツと細かく太鼓をたたき、健ちやの背中に寄りそっておどる。くるりとみや子がまわる。健ちやも大きくまわる。二人の速い動きと太鼓の音がびつたりと合う。すんだ笛の音が高く低く鳴りわたり、鉦がチリチリと高くひびく。その間をぬうようにとどろく太鼓。二人の背にぴんと立った白い長い二本の羽が大きくゆれる。

ほかのジシが二人の間にわりこんできた。

六頭のジシは、小太鼓とかん高い笛、鉦の速いリズムに入り乱れておどりくるう。

ああ、健ちやから離れちゃった。早くそばに行かなくちゃ。だめだ、手が重い。太鼓がたたけない。健ちや、どこー。

「みや子ちやはい子だ ねんねしな、

みや子ちやはい子だ ねんころり、

みや子ちやのおもりは どこへいた、

みや子ちやの……

」

どこかでああさんの歌う声が聞こえる。

みや子は、目を開けた。まっ白な天井に青白い蛍光灯が光っていた。ここはどこ？

「……あの山超えて 里へいた」

そつと頭を上げると、^④ かがさんがみや子の足の方でかるくふとんをたたきながら、小さな声で歌っていた。

「かがさん」

「ああ、みや子、気がついたのね」

「ここ、どこ？」

「久慈の病院よ」

「久慈!!」

「そう、みや子、健ちやと近道しようって、川飛んだでしょ。そして、飛びそこなって」

（ああ、そうだっけ。健ちやのところまで飛ぼうとしたんだ。そうして）

「左手の腕、折っちゃったのよ。すぐ健ちやのおじさんがくるまでここへ運んでくれたのよ」

「かがさん、ごめんなさい。わたし」

「いいのよ、みや子。健ちやが話してくれたわ。健ちや、とっても責任感じちゃって、さっきまでおじさんといってくれたの」

「わたしが鹿踊りに出られないかもしれないってがっかりしたら、健ちやがさそってくれたの。時間、忘れちゃってごめんなさい。とうさん、おこってる？」

「ううん、みや子がやりたがっていた鹿踊り、こんなことになってかわいそうだって」
「わたしのけが、大変なの？」

「うん、ちよつとね、骨が折れてるらしいからね。今日はとりあえず痛み止めしてね、あしたもう一度レントゲンでよく見て、手術することになるだろうって」

「手術!! じゃあ、入院してなくちゃだめ」

「そうね。三週間ぐらいかなって、お医者様おっしゃってた」

「かあさん、それで、今晚してくれるの」

「ええ、とうさんが、いてやれって」

「だって、牛の世話やなんかは」

「大丈夫。みんなで何とかするからって、それよりみや子。かあさん、みや子のこと、子守歌うたって寝かしつけたことなんかなかったと、今思ってたの。みや子は、いつもひとりで泣き寝入りだったなあって」

「かあさん、それで、子守歌うたってくれたの」

「そう、安心して眠りなさい。かあさん、ちゃんといてあげるから」

「うん」

気がつく、左手は、体の横側にぐるぐるまきにされていた。

ああ、鹿踊りだめになっちゃった。健ちゃとおどれなくなっちゃった。それに、このいそがしい時にかあさんに世話かけちゃって。

ぐぐぐと胸がいっぱいになった。鼻の奥がつーんとなり、目尻から涙がつつうと流れた。

かあさんが、そうつとそれをふいて、

「みや子、来年もあるんだもの。来年しっかりおどればいいよね」

と、いつてくれた。かあさん、ごめんね。

三週間の予定だったけれど、みや子は半月で退院できた。

その間、健は毎日電話をくれ、休みの日には見舞いにきてくれた。

「みやちゃ、ごめんね。みやちゃをあんなところにさそって」

「ううん、いいのよ。だけど、健ちゃと鹿踊り、おどりたかったな」

「みやちゃ、来年は田野畑村の百年祭だろ。山地小の鹿踊りもきつと出るよ。運動会と二度おどれるんだよ。いいじゃないか」

「ううん、わたし、健ちゃと……」

「おれも、きつと見にくるからさ」

健は、来年は中学生。⑤ みや子は、二人で聞いた、あのおはやしを思い出していた。

鹿踊りは結局、五年生はさきえにきまった。みや子の左手の包帯はまだとれないけれど、運動会には、全校綱引き以外はどの種目にも参加した。

とうさんが考えた仮装コンクールの『牛の親子』も、洋平がつまずいて浩太から離れ、子牛がまっ二つに分かれて、大笑いされたけど、二等賞に入った。

健の鹿踊りは、みや子が夢の中で見た以上に堂々として立派だった。今までの誰よりもすばらしいとみんなが拍手した。みや子も腕の痛いのも忘れて拍手した。健とおどれなかったことは、ちよつとさびしかったけど、くやしくも悲しくもなかった。(わたし、健ちゃといっしょにちゃんとおどったもんね。来年は健ちゃが『みやちゃよかったよ。とっても立派だったよ』って、ほめてくれるように精いっぱいおどるもんね)

そうしっかり心にきめながら、⑥ もう一度、二人で聞いたあのはやしを思い出していた。

(石井和代『山の子みや子』)

問一 ― 線部①「とうさんのいつていたことは本当だったのだ」とありますが、この時のみや子の気持ちを、今まではどのように思っていたのかもふくめて、百字以内で説明しなさい。

問二 ― 線部②「みや子は、どうしても鹿踊りに選ばれたいと、また思った」とありますが、みや子がこのように思ったのはなぜですか、説明しなさい。

問三 ― 線部③「みや子の頭の中でそれらが一ぺんにぐるぐるつとまわりだした。どうしよう」とありますが、これはどのようなことを表していますか、説明しなさい。

問四 ― 線部④「かあさんがみや子の足の方でかるくふとんをたたきながら、小さな声で歌っていた」とありますが、かあさんはこの時、どのような気持ちで子守歌を歌っていたと読み取れますか。七十字以内で説明しなさい。

問五 ― 線部⑤「みや子は、思い出していた」。 ― 線部⑥「もう一度、思い出していた」とありますが、それぞれのみや子の気持ちを、ちがいがわかるように説明しなさい。なお解答する際は、「⑤では」「⑥では」のように番号を用いて説明しなさい。 ― 線部を全て引用する必要はありません。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

言語がもつコミュニケーション機能、そして社会的知性仮説に着目すると、ヒトは音声言語に先だち、体の動きを体系化した身ぶり手ぶり、表情によるコミュニケーションによって進化適応してきたのではないかと考えることができます。発声のための身体構造がヒトとは異なるチンパンジーでも、視覚的な伝達手段、図形文字などを用いれば、ヒトの言語的特徴をある程度満たした理解、使用が可能であることは先述のとおりです。ヒトの言語を特徴づける萌芽レベルの能力は、チンパンジーにも共有されている可能性は否定できません。そして、チンパンジーの祖先とヒトの祖先が進化の過程で分岐した後に、より効率のよい伝達手段として音声言語が誕生したとは考えられないでしょうか。音声言語は暗闇でもやりとりができます。舌や喉を使うため両手が解放され、他者とコミュニケーションしながら物を操作することが同時にできます。①これを、「身ぶり言語起源説」と呼びましょう。

身ぶり言語起源説で重視されるのは、他者の行為を忠実に再現することを可能にする身体模倣能力です。ヒトは進化の過程で、模倣する能力を飛躍的に獲得してきましたが、それは、他者の身体の動きからなる身ぶりを、二者間以上の広がり、さらには仲間全員がルールを共有して理解し、使うことを可能にしました。さらに、身体模倣の重要な役割として、他者の行為の背後にある心の状態への気づきがありました。他者の身体の動きを自分自身で経験する積み重ねは、実際に身体を使って行うにとどまりませんでした。自分の身体経験にもとづき、他者の行為を頭の中でシミュレートすることにより、結果的に他者の心の状態まで深く理解できるようになった。こうした社会的能力を基盤として、ヒトは言語を獲得したと考えることはできないでしょうか。

一方、チンパンジーは、ヒトのように三者間以上の広がりをもった共通のルールにもとづいて身ぶりを使って他者とコミュニケーションすることはほとんどありません。アメリカのヤークス霊長類研究センターにいたM・トマセロたちは、チンパンジー集団内で身ぶりが伝播していくようすを調べました。その結果、ある身ぶりが起こる時の文脈やその相手は個体ごとに異なっていて、ある身ぶりが特定の二者間で繰り返し使われ始めると、その二者間だけが理解可能なルールとして用いられる場合がほとんどだったといえます。言いかえると、ある身ぶりがもつルールは特定の二者間以上に広がることはなかったのです。

こうした点を考えると、次のようなストーリーが浮かび上がります。他者の身体の動きに注目し、それを忠実に模倣することのできるヒトは、ある行為に一定のルールをもたせて、多数の仲間とそれを共有することができます。行為を共有することにより、その背後にある心の状態も理解しやすくなるでしょう。しかし、身体模倣能力に制約があるチンパンジーでは、身体の動きだけからなる行為である身ぶりを、二者間以上に広げ、さらには複数の仲間たちと共有し、それらを使ってコミュニケーションすること、心的状態を伝えあうことは難しいのではないのでしょうか。それが、私が^②ヒトの身体模倣能力と言語が深くかかわっている^(注4)と考える所以です。

(明和政子『まねが育むヒトの心』)

(注1) 萌芽……ものごとの始まり。「萌芽レベル」とは最初の段階ということ。

(注2) シミュレートすること……予測すること。

(注3) 伝播……伝わり広まること。

(注4) 所以……理由、わけ。

問一——線部①「これを、『身ぶり言語起源説』と呼びましょう」とありますが、「身ぶり言語起源説」とはどのような考え方ですか。七十字以内で説明しなさい。

問二——線部②「ヒトの身体模倣能力と言語が深くかかわっている」とありますが、筆者がそのように考えるのはなぜですか。八十字以内で説明しなさい。

三 各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 申し出をコジする。
- (2) 情報をシュシヤ選択する。
- (3) アジアの国々をレキホウする。
- (4) バイオリンの美しいドクソウ。
- (5) 温泉にトウジ客が来た。

このらんには
何も書かないこと

[illegible]